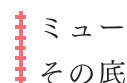




真面目で楽しい、専門知の世界

シンポジウム



ミュージアムと専門知
その底力、かっこよさ、おもしろさ

本シンポジウムでは、
それぞれの専門性をとことん突き詰めながら、
ときにはマニアックな世界に来館者を誘う、
魅力的なミュージアムの裏側に迫ります。
登場する館種は、水族館、天文科学館、昆虫館と、多種多様です。
各館の試みを通じて、お堅い内容でもやわらかく解きほぐす、
ミュージアムという場の「底力」を展望していきます。
専門知のあり方や専門家に対する信頼が時に厳しく問われる
今日の社会のなかで、大学ともインターネットとも違う、
ミュージアムの知のあり方を再考する機会になるはずです。
いつかミュージアムで働きたい方もぜひどうぞ！



日時／2024年10月20日(日)13:00～17:00

会場／北海道大学理学部5号館 大講堂
※Zoomによるオンライン配信を併用

パネリスト／井上 毅(明石市立天文科学館館長、山口大学時間学研究所客員教授)
北野 伸雄(磐田市竜洋昆虫自然観察公園 館長)
若月 元樹(むろと廃校水族館 館長)

司会・コーディネーター／今村 信隆(北海道大学文学研究院 准教授)

参加者のべ68名(オンライン配信、事後配信視聴者を含む)





専門家の遊び心が人とまちを巻き込む －真面目で楽しいミュージアム論

今村 信隆(北海道大学文学研究院)

「硬軟織り交ぜる」という表現があります。堅いものばかりで押し通すのではなく、柔らかいもの一辺倒でもなく、両者を巧みに使いこなす様を指す言い方です。今回のシンポジウムに集まってくださったのは、まさにこの「硬軟織り交ぜる」という表現がぴったりの、魅力的な3館をリードする館長の皆様でした。次々と紹介されるユニークな活動の数々に、会場からは何度も笑い声があがり、同時に、その奥深さに唸る声も多く聞かれました。堅い内容であってもやわらかく解きほぐす、ミュージアムの底力を再考する機会になったと言えるでしょう。

最初の登壇者は明石市立天文科学館館長の井上毅氏です。明石市には東経135度の子午線が通っています。これは、周知の通り、日本の時刻の基準となる線です。同市の人たちはこのことを誇りに感じ、かなり早い時期から、天文観察会などを開催してきたといいます。そうした地道な活動と多くの人びとの情熱によって、1960年、子午線の真上に開館したのが天文科学館です。日本の天文科学館としては古参の館の一つであり、特に、現在も稼働しているカールツァイス・イエナ社製のプラネタリウムは「長寿日本一」のプラネタリウムだということでした。

ただ、歴史ある同館の活動の数々は、まったく古さを感じさせません。むしろ、硬軟の両面にわたって、新しい価値や知見を発信する活動を精力的に行っているという印象です。井上氏が紹介してくださったものの中から、いくつか報告させていただきます。

まずは、硬軟の「軟」から。真っ先に触れるべきは、やはり「シゴセンジャー」の活躍でしょうか。誕生のきっかけは、井上氏によれば、「子午線」という言葉の読み方自体が知られていない事実ショックを受けたことだったそうです。まずは「シゴセン」という語をひろめるところから始めよう、と思いついたのが、戦隊モノのフォーマットを借りたヒーロー「シゴセンジャー」でした。こうして、ヒーロー「シゴセンジャー」と、なぜか井上氏にそっくりの悪役「ブラック星博士」とのかけ合いによってプラネタリウム解説を行うという、前代未聞の試みがスタートします。

手探りではじめた試みは、次第に話題となり、人気を博すようになりました。彼らの活動は一つのミュージアムの枠を軽々と飛び越えていきます。ときには一日警察署長になり、ときにはフェリーの船体デザインにキャラクターとして登場し、あるいは世界天文年のオープニング・イベントに招かれ、さらには実在する小惑星に「シゴセンジャー」と



いう名がつけられるなど、縦横無尽の活躍ぶりです。

井上氏はほかにも、YouTubeにアップロードされた135秒でわかる館の紹介動画や、同館のファンの方が制作したという戦隊ヒーローもの風のCG動画、井上氏らが火付け役となって全国にひろまった「熟睡プラ寝たリウム」など、ユニークな試みの数々を紹介してくれました。

とはいえ、井上氏が手がけてきた活動は、単におもしろい！というだけにとどまりません。

たとえば、2012年の金環日食の際には、完全な金環日食が見られた地点と、そうではなく部分日食にとどまった地点とを報告し合い、皆で日食マップをつくるという企画を実施したといいます。これは、誰でも気軽に参加できる体験型のイベントであることに加えて、学術的にも意義のある催しだったそうです。というのもこのとき、金環日食を観測できる範囲(金環日食帯)の予測が、NASA、国立天文台、そして他の専門家の3者で異なっていたからです。これを受けて井上氏は、金環日食限界研究会を立ち上げ、観測と調査を兼ねるイベントとして運営したということです。小学生から気軽に参加でき、しかも最新の研究動向にも

リンクすることができる。一般市民と専門知とが出会う好企画だと言えるでしょう。

あるいは、本シンポジウム開催日の前日にあたる2024年10月19日(土)に行われた、プラネタリウム100周年記念イベントも、大変興味深いものでした。これは、全国25館のプラネタリウムとハワイ・マウナケア山に設置されている「すばる望遠鏡」とを生中継で結ぶという企画で、井上氏が司会を務めたそうです。参加者は全国のプラネタリウムに散らばっています。その各館の間をZoomで同時中継してコミュニケーションをとりつつ、ハワイから送られてくる星空を皆で観察するというわけです。井上氏は「謎の一体感」があって大変盛り上がったとおっしゃっていましたが、確かに、ハワイの夕暮れ時、マジックアワーとも呼ばれる宵闇のなかに不意に彗星があらわれる様子は、思わず息をのむ美しさでした(あらわれたのは紫金山アトラス彗星だそうです)。

井上氏が明石市立天文科学館に就職したのは、阪神淡路大震災の直後だったといいます。震災により建物も倒壊寸前で、館内も破損していました。しかし、しばらくの休館期間を経て、奇跡的に無傷だったプラネタリウムを中心として再開すると、多くの来館者が訪れてくれたそうです。その様子を目の当たりにした井上氏は、「復旧」段階から「復興」段階に入り、人びとが文化を取り戻そうとする姿に感銘を受けたといいます。子どもたちを含む多様な人びとに配慮する同館のやわらかい活動の原点は、こうしたところにあるのかもしれない。

続いて、お二人目の登壇者は、磐田市竜洋昆虫自然観察公園の館長・北野伸雄氏です。

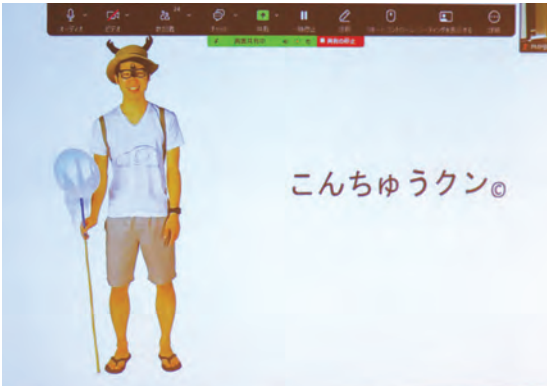
同館のキャッチコピーは、「虫と人が集まる『いつもの

場所』。わかりやすく素敵なキャッチコピーですが、ここでのポイントは、「人」よりも「虫」の方がさりげなく前に出ているのではないかと思います。虫が集まるからこそ、そこに人も集まる、というわけです。

虫を集める工夫には本当に頭が下がります。竜洋昆虫自然観察公園は、昆虫館として運営している建物の周囲に、自然観察公園がひろがる施設です。ただ、この場所は、もともとはゴミの焼却施設が建っていたところであり、虫・昆虫も決して多くはなかったといいます。事実、北野氏が紹介してくださった開館前の写真をみると、植生もまばらな、どちらかと言えば「殺風景」なところでした。その場所を、ほとんどゼロから造営し直し、管理を続けてきたそうです。僅か二十数年後の現在では、虫たちと子どもたちが出会い、賑やかな声が響く、貴重な体験の場になっています。

また、同館では、年に6回ほどの企画展を精力的に実施し、週末にはさまざまな体験イベントを行ってきました。企画展を行うということは、これもまた、虫たちを集めてくるということにほかなりません。そのラインナップの豊富さには圧倒されます。加えて、個人的には、北野氏がスライドで見せてくださった企画展のチラシのコピーにも、大変心を惹かれました。順不同で少しだけあげておくと、「足しげく、会いに来てください。」（ムカデ展）、「あなたの心もぐるぐる巻き」（クモ展）、「悪口から褒め言葉への挑戦」（歩く宝石ゴミムシ展）、「大は小を兼ねない。」（世界のカブト・クワガタ展）、「"じゃない方"にしか伝えられないことがある」（昆虫じゃない虫展）などなど、どれも大変魅力的です！

もちろん、虫が集まれば、それだけで自動的に人が集まってくれるわけではないでしょう。北野氏によれば、昆虫は極めて種数が多く、「地球は昆虫の惑星だ」という言い方もあるほどだといいます。そのため昆虫は、わたし



たち人間にとっても身近であり、特に子どもたちにとっては自然の世界、生き物の世界への入口でもあると北野氏は説きます。しかし、身近であり、人間の生活圏とも密接な関係があるゆえに、嫌われがちでもあるというのが、虫・昆虫たちのもう一つの側面だそうです。うまく工夫をしないと、一般の人に虫を届けたり、興味のない人たちに足を運んでもらったりすることはできないというわけです。では、どうすればよいのか。

同館職員の柳澤静磨氏は、自ら「ゴキブリスト」を名乗り、ヒトとゴキブリをつなぐ架け橋として活動を行っているそうです。同氏はたとえば、同館の名物企画である「ゴキブリ展」を継続的に手がけ、人気を博しています。毎回のゴキブリ展では、ゴキブリの人気投票であるGKB48センター争奪総選挙を実施。上位7位（神セブン）に入ったゴキブリは、アクリルスタンドとして商品化するといった徹底ぶりです。素人としては、ゴキブリたちに、そもそも投票が成り立つほどの種数が存在するという事実にも驚きます。ちなみに同氏は、ゴキブリの新種を発見し、これが日本では35年ぶりの快挙として話題になったこともあるとのことでした。

同館に在籍するもう一人のスターが「こんちゅうクン」です。明石市立天文科学館のブラック星博士が井上毅館長に似ていたように、こんちゅうクンもなぜか館長・北野伸雄氏と瓜二つですが、そこにはあえて触れずに、彼の活動を追ってみます。

同館の公式リアルキャラクターとして、館の広報と昆虫の普及に取り組むこんちゅうクン。その活動は幅広く、市内の小学校に出前授業に行ったり、広報紙の表紙を飾ったり、さらにはラジオ局でレギュラーコーナーをもっていたりと大忙しです。最後にあげたラジオ番組では、こんちゅうクンが、昆虫的な視点でリスナーのお悩みに答えてくれるとか。

こんちゅうクンはまた、書籍の執筆やグッズの開発も手がけています。「虫」にちなんで64種のオリジナル和歌を詠んだ「こんちゅう和カルタ」では、虫への愛と、ユーモアと、言葉選びのセンスが炸裂しています。オリジナルカレンダー「オムシのことは」では、虫の立場からの格言に、思わず頬がゆるみます。北野氏いわく、上からでもなく下からでもなく、「斜めから」昆虫を紹介するのが、彼、こんちゅう



クンのスタイルとのことでした。

こんちゅうクンはまた、ほかのジャンルとのコラボレーションも数多く手がけています。たとえばサッカーです。なぜか北野氏と同様にサッカーファンであるこんちゅうクンは、ジュビロ磐田のクラブアンバサダーも務めているそうです。ジュビロ磐田の試合会場にイベントブースを出して昆虫とのふれあいイベントを催したり、昆虫によるベストイレブン「オムシJAPAN」を発表したり、『サッカーダイジェスト』誌にも寄稿したりと、サッカー界でも知る人ぞ知る存在。また、ビアパブで開催した「オトナの昆虫教室（虫達の恋バナ）」や、経営戦略を昆虫視点で再考する「こんちゅう×経営」など、ユニークなコラボ企画にも果敢に挑戦し続けています。

講演の最後で北野氏は、ミュージアムの専門性を一つの山になぞらえて、図示してくれました。山の頂上付近、すなわち専門知に近づくようとする動きとともに、裾野を広げようとする活動も必要であると北野氏はいいます。のみならず、一つの山、一つの専門にとどまることなく、他の山から人をつれてくるようなコラボレーションの活動にも、同館は積極的に取り組んでいるとのことでした。虫も人も幸せにする、出会いの場としてのミュージアムの姿であると思います。

講演の最後を飾ったのは、むろと廃校水族館の館長・若月元樹氏です。

廃校と水族館。なんとも心を動かされる組み合わせですが、とはいえ最初に押さえておきたいのは、同館が専門家たちの地道な活動をベースとして生まれたという点です。

むろと廃校水族館の運営を担うのは、NPO法人日本ウミガメ協議会です。ウミガメの調査・研究に取り組むと

ともに、調査・研究・保護に携わる人たちを取りまとめている団体だといいます。もともと室戸市とは直接の関係がなかったこの協議会が、なぜ、水族館の運営を引き受けることになったのでしょうか。

日本ウミガメ協議会と室戸市との最初の接点は、若月氏によれば、同市市内の国道にかかる橋の架け替えに際し、アドバイスを求められたことでした。このことがきっかけとなって室戸市とのつながりが生まれたのですが、その後、期せずして、協議会のスタッフが何度も室戸を訪れるようになります。というも、室戸沖の定置網にウミガメがかかる事例が後を絶たず、そのたびに協議会に連絡が入ったからです。

若月氏が地図やデータを示しながら説明して下さったように、そもそも室戸近辺は、多くのウミガメが通過する重要な地点だそうです。また、この海域の定置網にかかるアカウミガメは、研究上も無視できない重要性をもっているといえます。アカウミガメは、アメリカ大陸の近辺で成長し、太平洋を横断して日本にやって来て産卵します。ただ、日本での産卵時に陸上で調査できるのは、当然な



がら、成熟したメスだけです。それに対して、定置網にかかってしまうウミガメの中には、まだ若い個体やオスの個体が混ざっています。このようなウミガメたちの調査を続けるために、日本ウミガメ協議会はやがて、室戸にスタッフを常駐させるようになったというわけです。

室戸市は、かつては、捕鯨やマグロ漁の基地として栄えた場所でした。けれども、遠洋漁業が衰退してからは人口が減少し、小学校も多くが廃校になっていました。その廃校の利活用事業として持ち上がった水族館運営に日本ウミガメ協議会が手をあげ、2018年、むろと廃校水族館がオープンしたということです。一方の室戸市側は廃校の利活用、観光客誘致、地域活性化を目指し、もう一方の日本ウミガメ協議会側は研究拠点の拡充や入館料収入による継続的な運営費の捻出を目指す。両者の利害が一致し、いよいよ水族館運営がスタートします。

ただ、若月氏も述べていたように、水族館のような施設を創ろうとする場合には、普通、人口や交通の便などを加味したうえで、採算がとれるかどうかを判断することが重要です。しかしながら同館は、そうしたことをひとまず度外視したかのような場所に建っており、当初は、集客面でさまざまな懸念も寄せられたといえます。そこで、そのような懸念を覆すかのごとく、若月氏らはユーモラスな活動の数々を打ち出していきます。

特徴的であるのは、小学校の校舎と設備をフルに活用した取り組みです。小学校の手洗い場は、子どもたちにとって接しやすい高さのタッチプールになります。頑丈な跳び箱も、側面をくりぬかれ、水槽に変身。AED装置が入っていた設備も、容赦なく水槽に変えられていました。極めつけは、屋外の学校プールです。保護されたウミガメたちが泳ぐ25メートルのプールは、来館者たちの格好の



フォトスポットとして人気を博しています。

学校の施設はさらに、同館のユニークな活動の場にもなっています。旧理科室では、学校単位で訪れた児童・生徒たちが魚の解剖体験を行います。家庭科室では、魚の調理体験を行って、皆で魚を食べるというイベントも。ちなみに、このとき魚をさばく道具は、地元・高知の土佐打刃物だそうです。また、人数が多い修学旅行生たちは、屋外で「スクール・バーベキュー」を楽しむことも可能です。これは、教室で使っていた机の天板を網に置き換え、魚介などを焼いて味わうというもの。炭は室戸市産の備長炭だというから、本格的です。

学校であることを、ある意味で逆手にとったイベントにも、興味深いものが盛りだくさんでした。たとえば、学校の椅子と机でお酒が飲める「酔族館」。独特の背徳感がありそうです。あるいは、先述した25メートルの清掃イベント。参加者に清掃をしてもらうだけのイベントとのことでしたが、紹介して下さった写真にうつる生徒たちは満面の笑みで楽しそうでした。コカ・コーラの自動販売機を石碑風につくり、旧小学校の校歌を記した「校歌・コーラ」なども、洒落が利いています。

洒落と言えば、室戸市内の飲食店とのコラボレーション・イベント、「サバらしい日々」と、その続編「あなたのシイらない魚介」も痛快です。サバ料理、シイラ料理を食すイベントですが、回数券を購入すると水族館オリジナル

のTシャツがもらえるという特典付きだったそうです。また、同じように地域の事業者を巻き込んでいるのが、文具風・図鑑風のオリジナル・グッズ、プロレス風や某名作映画風のカレンダー、かまぼこなどのオリジナル食品などです。地域の印刷会社、菓子店、文具店、かまぼこ店などと協働し、地域全体を巻き込んでいこうとするエネルギーを感じます。「定置網のしくみ」を図解した下敷きは、本職の漁師さんたちも買っていくとのことでした。

他にも色々あったのですが、すべてを紹介することは、とてもできそうにありません。専門家集団の調査・研究活動をベースとする水族館が、地域を巻き込み、学校団体を呼び込み、観光客を引き寄せて唯一無二の活動を展開しています。脱帽です。

現代の社会のなかでは、種々の専門知のあり方や専門家に対する信頼が時に厳しく問われることもあります。しかし、3人の登壇者の方々の講演からは、そのような時代におけるミュージアムのあり方を再考するヒントを得ることができたように思います。専門知が起点となり、専門家の遊び心が大きな渦となって、次第に人びとを巻き込んでいく力と表現できるかもしれません。

なお、後半のディスカッションでは、シンポジウムの会場にあのブラック星博士が来襲するというハプニングもありました。天文にまつわるクイズで会場を沸かせてくれたのですが、なぜ、井上毅館長が席を外しているタイミングを見計らったかのようにやって来たのかはわかりません。

